

定家

古名

定家葛

禪竹作

前

ワキ 北国の僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 式子内親王

地は 京都

季は 十月

「山より出づる北時雨。く。行方や定めなかるらん。

「是は北国方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち都に上り候。

「冬立つや。旅の衣の朝まだき。く。雲も行きかふ遠近の。山又山を越え過ぎて。紅葉に残る詠めまで。花の都に着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早都千本のあたりにて有りげ

に候。暫く此あたりに休らはゞやと思ひ候。面白

や頃は神無月十日余り。木々の梢も冬枯れて。枝に残りの紅葉の色。所々の有様までも。都の気色は一しほの。詠め異なる夕べかな。あら笑止や。

俄に時雨が降り来りて候。是に由有りげなる宿りの候。立ち寄り時雨を晴らさばやと思ひ候。

「なふく御僧。何しに其宿りへは立ち寄り給ひ候ふぞ。

ワキ詞

「唯今の時雨を晴らさん為めに立ち寄りてこそ候へ。」

シテ

「それは時雨の亭とてよしある所なり。其心をも知し召して立ち寄せ給ふかと。思へばかやうに申すなり。」

ワキ

「実にく是なる額を見れば。時雨の亭と書かれたり。折柄面白うこそ候へ。是は如何なる人の建て置かれたる所にて候ふぞ。」

シテ

「是は藤原の定家の卿の建て置き給へる所なり。都の内とは申しながら。心すぐく時雨物あはれなればとて此亭を建て置き。時雨の頃の年々は。こゝにて歌をも詠じ給ひしとなり。古跡といひ折柄といひ。其心をも知し召して。逆縁の法をも説き給ひて。彼御菩提を御弔ひあれと。勧め参らせん其為めに。是まで頭はれ来りたり。」

ワキ

「さては藤原の定家の卿の建て置き給へる所かや。」

さてく時雨をとむる宿の。歌はいづれの言の葉
やらん。

シテ「いやいづれとも定めなき。時雨の頃の年々なれば。
分きてそれとは申し難しさりながら。時雨時を知
るといふ心を。偽のなき世なりけり神無月。誰が
誠より時雨れそめけん。此言がきに私の家にてと
書かれたれば。若し此歌をや申すべき。

ワキ「実にあはれなる言の葉かな。さしも時雨はいつは
りの。亡き世に残る跡ながら。

シテ「人はあだなる古事を。語れば今も仮の世に。

ワキ「他生の縁は朽ちもせぬ。是ぞ一樹の陰の宿り。

シテ「一河の流れを汲みてだに。

ワキ「心を知れと。

シテ「折からに。

地「今降るも。宿は昔の時雨にて。く。心澄みにし
其人の。あはれを知るも夢の世の。実に定めなや

定家の。軒端の夕時雨。古きに帰る涙かな。庭も籬もそれとなく。荒れのみ増さる草村の。露の宿りも枯々に。物すぎき夕べなりけり。く。

シテ詞

「今日は志す日にて候ふ程に。墓所へ参り候ふ御参り候へかし。

ワキ詞

「それこそ出家の望みにて候へ。やがて参らうずるにて候。

シテ

「なふく是なる石塔御覧候へ。

ワキ

「不思議やな是なる石塔を見れば。星霜ふりたるに葛葛はひまとひ形も見えず候。是は如何なる人のしるしにて候ふぞ。

シテ

「是は式子内親王の御墓にて候。又此かづらをば定家葛と申し候。

ワキ

「あら面白や定家葛とは。如何やうなる謂にて候ふぞ御物語り候へ。

シテ

「式子内親王始めは賀茂の斎の院に備はり給ひし

が。程なく下り居させ給ひしを。定家の卿忍びく
の御契り浅からず。其後式子内親王程なく
空しくなり給ひしに。定家の執心かづらとなつて
御墓にはひまとひ。互の苦しみ離れやらず。共に
邪淫の妄執を。御経を読み弔ひ給はゞ。猶々語り
参らせ候はん。

地クリ
「忘れぬ物をいにしへの。心の奥の忍山。忍びて通
ふ道芝の。露の世語りよしぞなき。

シテサシ
「今は玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば。

地
「忍ぶる事の弱るなる。心の秋の花薄。穂に出でそ
めし契りとて。又枯々の中となりて。

シテ
「昔は物を思はざりし。

地
「後の心ぞはてしもなき。

クセ
「あはれ知れ。霜より霜に朽ち果てゝ。世々に旧り
にし山藍の。袖の涙の身の昔。憂き恋せじと御祓
せし。賀茂の斎の院にしも。備はり給ふ身なれど

も。神や受けずもなりにけん。人の契りの。色に出でけるぞ悲しき。包むとすれどあだし世の。あだなる中の名は洩れて。よその聞えは大方の。空恐ろしき日の光り。雲の通路絶え果てゝ。乙女の姿とゞめ得ぬ。心ぞつらき諸共に。

シテ

「実にや嘆くとも。恋ふとも逢はん道やなき。

地

「君かづらきの嶺の雲と。詠じけん心まで。思へばかゝる執心の。定家葛と身はなりて。此御跡にい

つとなく。離れもやらで蔦紅葉の。色焦がれまとはり。荊の髪もむすばゝれ。露霜に消えかへる。妄執を助け給へや。

ロンギ地

「旧りにし事を聞くからに。今日も程なく呉はとり。

あやしや御身誰やらん。

シテ

「誰とても。亡き身のはては浅芽生の。霜に朽ちにし名ばかりは。残りても猶よしぞなき。

地

「よしや草葉の忍ぶとも。色には出でよ其名をも。

シテ「今は包まじ。

地「此上は。我こそ式子内親王。是まで見え来たれども。誠の姿はかげろふの。石に残す形だに。それとも見えず蔦かづら。苦しみを助け給へと。いふかと見えて失せにけり。く。(中入)

ワキ歌「夕べも過ぐる月影に。く。松風吹きて物すごき。草の陰なる露の身を。思ひの玉の数々に。弔ふ縁は有難や。く。

後ジテ「夢かとよ闇の現の宇津の山。月にもたどる蔦の細道。昔は松風羅月に詞をかはし。翠帳紅閨に枕をならべ。

地「さまぐなりし情の末。

シテ「花も紅葉もちりぐに。

地「朝の雲。

シテ「夕べの雨と。

地「古事も今の身も。夢も現も幻も。共に無常の。

世となりて跡も残らず。なに中々の草の陰。さらば葎の宿ならで。外はつれなき定家かづら。是見給へや御僧。

ワキ「あら痛はしの御有様やな。あら痛はしや。仏平等説如一味雨。随衆生性所受不同。

シテ「御覧ぜよ身は仇波の立ち居だに。亡き跡までも苦しみの。定家葛に身を閉ぢられて。かゝる苦しみ隙なき所に。有難や唯今読誦し給ふは藥草喩品よ

なふ。

ワキ「中々なれや此妙典に。洩るゝ草木のあらざれば。執心のかづらを掛けはなれて。仏道ならせ給ふべし。

シテ「あら有難や実にもく。是ぞ妙なる法の教へ。

ワキ「普き露の恵みを受けて。

シテ「二つもなく。

ワキ「三つもなき。

地「一味の御法の雨のしたゞり。皆湿ひて草木国土。
悉皆成仏の機を得ぬれば。定家葛もかゝる涙も。
ほろ／＼と解けひろぐれば。よろ／＼と足弱車の。
火宅を出でたる有難さよ。此報恩にいざゝらば。
有りし雲井の花の袖。昔を今に返すなる。其舞姫
の小忌衣。

シテ「おもなの舞の。

地「有様やな。
(序の舞)

シテ「おもなの舞の有様やな。

地「おもなや面はゆの有様やな。

シテ「本より此身は。

地「月の顔ばせも。

シテ「曇りがちに。

地「桂の黛も。

シテ「落ちぶるゝ涙の。

地「露と消えてもつたなや蔦の葉の。葛城の神姿。恥

かしやよしなや。夜の契りの夢の内にと。有りつ
る所に帰るは葛の葉の。もとの如く。はひまとは
るゝや定家葛。はひまとはるゝや定家かづらの。
はかなくも形は。埋もれて失せにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著